文学作品から考える恋愛感情と尊敬感情の違い

3年2組31番 村山 日菜多

1. はじめに

私は「人間の感情」に関して、いつからかとても興味を持っている。私が「人間の感情」について注目するようになった動機は主に2つある。1つ目は、私の友人に同性を好きだった人がいたことである。私が小学校六年生のとき、同性を好きだと友人にカミングアウトされた。それを聞いて正直とても驚いたし、今後どういう風に関わればいいのか分からなくなってしまった。その時の私にはおかしな事のように思えてしまい、その子に対して、緊張に近い感情を持ったことを今でも覚えている。口では、同性愛を受け入れるとはいくらでも言えても、実際に近くの人がそうだと知ったら受け入れ難いものなのだと身をもって知った。この経験を通して、今まで自分には関係がないと思っていた同性愛について身近に感じることが出来たし、考える機会を持つことが出来た。2つ目は、私自身が抱いたことがある感情からである。これも、小学校六年生の時、私は同性の友人に対してよく分からない感情をもったことがあった。何でもそつなくこなす友人に対してかっこいいと思っていたし、憧れていた。そんな時にふと思ったことは、これは一体どういう感情なのだろうといあるのかうことだった。恋愛的に好きかといわれてみれば違うけれど、尊敬ともなんだか違う、そういう言葉にするのがとても難しい複雑な感情を持った。その時はそのままその気持ちも薄れていきましたが、今こうして動機として当時の感情を捉え直している。私はこの経験から、人は本当に性別に関係なく恋愛的な感情を相手に対して抱くのだろうと思った。同性を好きになった人は、好きになった人が本当に偶然同性だっただけなのだろうと思うようになった。この2つの動機から、「人間の感情」特に尊敬・恋愛に関する感情について興味を持ち、考えたいと思った。

２．序論

インターネット上で「好きを表す語」を探すと、「慕う」という語が出てくる。「慕う」を広辞苑で調べてみると、①（恋しく思い、また離れ難いと思って）あとを追って行く。②会いたいと思う。恋しく思う。なつかしく思う。③理想的な状態・人物などに対してそのようになりたいと願い望む。という大きく3つの意味が出てきた。この3つの意味は似ているが、特に①・②は恋愛的感情、③は尊敬的感情の意味を色濃く示しているように思われる。果たして、この『恋愛感情』と『尊敬感情』に違いや差はあるのだろうか。そこで本論文では、『恋愛感情』と『尊敬感情』には曖昧にも違いがあることをいくつかの理由を挙げて明らかにする。そのために、先行論文や文学作品を調べて研究した。

３．本論

武藤世良さんの研究報告「現代日本人における尊敬関連感情の階層的意味構造」中のアンケートでは、20歳から79歳までの1007人に「言葉の意味に関するアンケート」がとられた。そのアンケート結果で分けられたプロトタイプから更にフリーの統計ソフトウェアであるANOVA君によって、言葉が類似度評定されたものによると「敬愛」と「尊敬」、「憧れ」と「敬愛」、「憧れ」と「心酔」などが類似度が高いとされている。それぞれの言葉の意味を確認しておくと、「憧れ」は理想とする物事に強く心が引かれること。「敬愛」は尊敬し、親しみの心を持つこと。「心酔」は心から慕って感心すること。また、夢中になってそれにふけること。という意味をそれぞれ持っている。これらは尊敬する相手にも、恋愛感情を持つ相手に対してもよく使われる言葉である。例えば心酔の場合、「私はあの本を書いた作者に心酔した」などという文があれば、尊敬の意味が含まれていると捉える人が多いと思うし、「彼は彼女に心酔している」という文があれば、恋愛的な意味で捉える人が多いだろう。このことから、世間的に見ても、恋愛感情の意味を含んだ言葉と尊敬感情の意味を含んだ言葉の違いは判断しにくく、曖昧であることが分かる。

この曖昧さをより明確にしたいと思い、私は時代の異なる文学作品を読み、恋愛感情と尊敬感情の関係について考えた。

まず夏目漱石の著書『こころ』を読んだ。この話では、中で描かれている先生・K・お嬢さんの話が最も取り上げられ、メインともいえるが、私は今回上・下で描かれている先生と「私」の関係に注目した。「私」は先生を心から慕っているが、それは本当に尊敬からくる感情なのか考えた。

(『こころ』引用)
「恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。
「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。
「なぜですか」
「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとっくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」
私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であった。思いあたるようなものは何にもなかった。
「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」
「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」
「今それほど動いちゃいません」
「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」
「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」
「恋に上る楷段なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」
「私には二つのものが全く性質を異にしているように思われます」
「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があって、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私はこの一連の流れ、特に
「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」
「恋に上る階段なんです。異性と抱き合う手順として、まず同性の私の所へ動いたのです」
というこの場面では「私」は先生に対しての尊敬感情は認めているものの、それが恋であるということは否定している。しかし先生は「私」の気持ちについて「恋に上る階段」だと表現している。これらから恋愛感情と尊敬感情は非常に密接であるが、違いがある感情であること、また尊敬よりも恋の方が段階的に上に位置する感情であると考えられる。「私」が先生への気持ちを恋ではないと否定しているのは、「私」は先生のことを憧れの対象として捉えているからである。「憧れ」とは、理想とする物事に強く心が引かれることを意味する。しかし先生は「私」が自分に対して抱いている感情は恋に分類されるものだと認識していることが分かる。ここから人それぞれ感情の認識の仕方は違い、境界は曖昧だということがわかる。私はこれらから尊敬から感情が高まっていくと、憧れと恋に別れるのだろうと考えた。しかし、この二つの感情は進行の仕方が違うと思う。

　次に吉本ばななの著書『キッチン』を読んだ。この物語では、肉親を失った主人公のみかげが祖母と仲の良かった雄一という青年とその母のえり子と暮らし始め、その優しさに触れ仲を深めていく。みかげと雄一は曖昧な関係のままで終わるが、私はこの2人の関係に注目し、考察した。

（『キッチン』引用）
私は雄一に恋していないので、よくわかる。彼にとっての万年筆と彼女にとってと全然質や重みが違ったのだ。世の中には万年筆を死ぬほど愛している人だっているかもしれない。そこがとっても悲しい。恋さえしていなければ、わかることなのだ。

私は今、彼に触れた、と思った。一ヵ月近く同じ所に住んでいて、初めて彼に触れた。ことによると、いつか好きになってしまうかもしれない。と私は思った。恋をすると、いつもダッシュで駆け抜けてゆくのが私のやり方だったが、曇った空からかいま見える星のように、今みたいな会話の度に、少しずつ好きになるかもしれない。

となりにいるのは確かに、この世の誰よりも近い、かけがえのない友達なのに、二人は手をつながない。どんなに心細くても自分の足で立とうとする性質を持つ。でも私は、彼のこうこうと火に照らされた不安な横顔を見て、もしかしたらこれこそが本当のことかもしれない、といつも思う。日常的な意味では二人は男と女ではなかったが、太古の昔からの意味合いでは、本物の男女だった。

私はこれらの引用箇所から二人の友達でも恋人でもない、それでも特別な感情を確実に持っている、複雑で曖昧な関係を読み取った。この話はみかげ視点で描かれており、みかげは「雄一に恋をしていない」や「かけがえのない友達」といっている。しかし一方で、雄一を「いつか好きになってしまうかもしれない」と思っており、恋愛感情をやがて持つ可能性があると考えている。私はここから友人に対して抱く感情から恋愛感情に発展することがあると考えた。つまり密接な関係の友人から、より密接な恋人という関係になることがあるとも

言える。私は友人への「好き」という言葉は尊敬感情が含まれる言葉であると考える。なぜなら好きな人や恋人に対して抱く「好き」とは明らかに違うものだからである。これらから私はやはり尊敬感情と恋愛感情は非常に似ており、また密接な位置関係であると考える。

４．結論

先にも述べたように私は恋愛感情と尊敬感情に違いがあると考える。これは時代の違う文学作品『こころ』と『キッチン』を読んで出した結論である。恋愛感情と尊敬感情の境界線は人によってそれぞれである。しかし、抽象的ではあるが「尊敬」という感情から真っ直ぐに進んだ形で生まれたのが「憧れ」、上の方へ階段を上るようにして生まれたのが「恋」であると考えた。それゆえに「恋」は「尊敬」とは少し違うところに位置する感情であると考えた。今回の研究で恋愛感情と尊敬感情の違いは曖昧ながらも分かったが、結果を抽象的にしか出せず、具体的に何がどう違うのかは明らかにすることができなかった。

５．おわりに

私はこの研究を始めるまで恋愛感情と尊敬感情は全く別のものだと思っていた。なぜなら私が今まで誰かに対して抱いてきた恋愛感情と尊敬感情は全く別のものだったからである。しかし先行論文や文学作品を読み進めていくと、同じグループに属している感情だと認識するようになった。研究を進める中で仮説に対して答えることができ、達成感を感じた。また文学作品でどの箇所を引用して論じるべきかを考えることに苦労した。私はこの論文を作成するにあたってより多くの人に読んでもらいたいと考えて作った。なぜなら、未だ日本では「同性愛」を受け入れがたく感じている人がいるからだ。そのような人がこの論文を読むことで、恋と憧れは密接なものであると理解を深めることが出来ると思う。誰もが同性愛者になりうるということを伝えたい。まずは、学校の生徒に読んでもらいたい。いつかいわゆる「普通の恋愛」に同性愛も含まれ、偏見や差別のない世の中になることを願っている。

６．参考文献・出典

夏目漱石（1952）『こころ』新潮社
吉本ばなな（2002）『キッチン』 新潮社
武藤世良（2016）「現代日本人における尊敬関連感情の階層的意味構造」